

# 『千差人別』

「最後の晩餐」といえば、レオナルド・ダ・ヴィンチの作品が有名だが、数えきれないほどの画家が、この場面を描いている。

手法も作風も皆、千差万別。

インターネットの世界では、情報の価値は「千差人別」。



「最後の晩餐」 マールテン・ド・フォス

PSPED BITS

## 『伽藍とバザール』

「伽藍とバザール」。1997年に米国のソフトウェア技術者エリック・レイモンド氏が発表した論文だ。その後、1999年には日本語訳の書籍が出版されている。先日社員から、過去に影響を受けた本は何かと訊かれたのだが、ふと学生時代に出会ったこの論文に衝撃を受けたことを思い出した。

伽藍という言葉は少し難しいかもしれない。私は学生時代に建築を学んでいたもので、宗教施設の建物の配置構成を意味するこの言葉には馴染みがあった。もともと、原文は「カテドラル」なので、「大聖堂とバザール」と訳した方が解りやすかったかもしれない。

この論文で伽藍とは、組織の中央集権的な体制によって管理され、まるで静かで荘厳な宗教施設をつくるような開発スタイルの比喩で、バザールとは、組織に所属しない個人が主体となって、何でもオープンにして、何でも受け入れ、任せられるものは何でも任せながら進めていく、まるで騒々しい市場のような開発スタイルの比喩だ。

ソフトウェア技術者なら誰でも知っている「リナックス」というOS(基本ソフト)がバザール型開発スタイルの代名詞だ。リナックスOS無くして現在のIT産業の発展は無いと言って良いくらい、全世界に大きな影響を与えている。伽藍がウィンドウズでバザールがリナックス。新しいムーブメントが巨人マイクロソフトを倒すんだ、などと喧伝する人がいたのを覚えている。

建築を学んでいた私がIT業界で働くことになったその決意にも、この論文が少なからず影響している。予々、ITが個人の力を強め、コミュニティに大きな影響を与えることを気にしていた私にとって、バザール型開発スタイルは、ITが自ら新しいコミュニティのあり方を実証しようとしているように見えた。そのとき私は、「個人」対「組織」という21世紀の一大テーマの中心にあるのがITであり、今、時代の主役は建築ではなくてITなのだ確信した。奇しくも建築用語がタイトルに添えられたこの論文によって、私の人生は建築からITへと大きく舵を切るようになった。



佐谷宣昭 Nobuaki Satani  
1972年生まれ。九州大学工学部建築学科卒業。2000年九州大学大学院人間環境学専攻博士課程修了、博士(人間環境学)。翌月起業。株式会社パイブドビッツ社長CEO。明日の豊かな情報生活に貢献したいとの想いから、「情報資産の銀行」の必要性を説く。官公庁や都市銀行、小売業など10,096の事業者向け情報資産プラットフォーム「スパイラル(R)」を提供中。  
株式会社パイブドビッツ  
東京都港区赤坂2丁目9番11号  
03-5575-6601(代表) <http://www.pi-pe.co.jp/>